

# 同意語からなるワードペアの繰り返しに関する一考察

青 木 繁 博

## On the Repetition of Synonymic Word Pairs

Shigehiro Aoki

### 0. はじめに

*The Book of Margery Kempe* (以下Margery)には多くのワードペアが使われており、そのことは、Margeryの文体には繰り返しが多く、やや退屈であるといった評価につながっている場合がある。しかし、例えば *The Shewings of Julian of Norwich* (以下Julian)をはじめとする同時代の複数の作品でも、同じようにワードペアが多く見られ、ワードペア自体は、その時代の散文の特徴の1つであると広く知られている。それらの作品では、Margeryの場合とは異なり、ワードペアの使用そのものは文体に対するネガティブな評価には結び付いていないようである。以上のことから、Margeryと他の作品とではワードペアの使い方に何らかの違いがあると想定される。具体的に、Margeryのワードペアの何が、文体を低く評価されることにつながっているのだろうか。この点を考察することが本論文の目的である。

### 1. 研究の背景と目的

#### 1.1. 中英語散文作品とワードペア

Margery、Julianに限らず、ワードペアは同時代の散文作品に頻繁に見られることが知られている。後の節で挙げるMargeryとJulianの一方または両方に関する先行研究に加えて、多くの先行研究や筆者の過去の研究においてワードペアの機能や効果が論じられてきた。一例を挙げると、重要な語を強調する機能に加えて、口調を整える、リズムを生む、同時代・同ジャンルの作品に語り口を合わせるといった、いくつかの効果があると考えられている。

特に、ワードペアの使用が多いとされるMargeryでは、ワードペア自体がその文体に寄与する要素であると認識されるであろう。ただし、その評価がどうかについては、意見が分かれるところかもしれない。

#### 1.2. ワードペアが多く見られる文体の評価について

MargeryとJulian、その一方または両方の文体とワードペアとの関係については、Wilson、Stone、Shibata、Yamaguchi、Katamiなどで考察されている。特にWilsonとStoneの間には、Margeryの文体をめぐって、ワードペアが多く使われていることに対する評価の違いが見られる。この点については

Stoneの、Julianのワードペアを多く紹介している前段の箇所に詳しい (p.123)。Stoneによると、WilsonはMargeryの文体はJulianのそれとは大きく異なると評価しており、その根拠として、Margeryがワードペア表現を多用している（多用しすぎている）ことを挙げているとしている。しかし、StoneがJulianのワードペアを網羅的に調べたところ、Julianもまた同種の表現を多用しており、その論法ならばJulianの文体も必ずしも高く評価されないのではないか、ということのようである。

ワードペアそのものが多く見られることと、それを含む文体が評価されることは、必ずしも直接結び付くのではないかもしれない。それでも、複数の研究者を含む読者にとって、一見同じように使われているかに見える「繰り返されるワードペア」が、それだけでは漠然とした印象を与えることもあり得るのではないだろうか。ある程度決まった観点に基づいて、それぞれのテキストでのワードペアの使い方を精査することで、より明示的に、どの面においてMargeryとJulianなどとの間で文体の評価が分かれているかが記述できるのではと考えた。

以上の点に基づき、本論文ではMargeryとJulianとを比較して、同意語からなるワードペアの使い方がどのように異なるかを調査した。なお具体的にどこを見ていくか、ワードペア使用のどの面に着目してデータを収集し考察するかについては、次の節で述べたいと思う。

### 1.3. ワードペアの局面を切り分けることについて

ワードペアはよく「冗長だ」と言われることがあるが、同意語からなるワードペアや、同意語に近い語からなるワードペアが、そのような評価を受けるときには、以下の3つの異なる局面があると考えられる。

意味の重なり……同じような意味の語が続く場合、新たな情報が少ないと受け取られるであろう。  
数・頻度……総じてあまりにも数が多いとき、または場合によっては局所的に多く見られるとき、冗長さを感じられるであろう。

決まった形であるか……語順を変えるなり、他の語句とも組み合わせるなど、ヴァリエーションの多少によっても、受ける印象は異なるであろう。

当然のことだが、もともと意味の重なりのある表現が、決まった形で何度も繰り返されるならば、それは冗長だと受け取られ、ひいては、その文体が批判されるのもやむを得ないであろう。そこまではないだろうが、Margeryのワードペアの使用においては、それに近いことが起こっているのではと考えられる。これに対してJulianでは、同意語からなるワードペアの使用自体はある程度見られるとしても、数・頻度とヴァリエーションの面で、Margeryとは異なるところがあるのではと予想される。このようにワードペアの局面を切り分けることで、以下の章では、MargeryとJulianにおける同意語からなるワードペアを考察したいと考える。

## 2. 調査と考察

本論文では、Margeryにおける同意語的なペアを明示的に扱っていたShibataとYamaguchiが挙げた例を中心に調査を行った。なおShibataでは“synonymic paris”として、Yamaguchiでは“synonymous pair-words”として、同意語からなるペアが扱われている。両者が挙げたワードペアの中でも、MargeryとJulianとで違いが見出せなかった例や、すでに筆者の過去の研究で主題的に扱ったことのある例など

を除いて、以下のワードペアについて考察または言及する。なおこれ以降、中英語の綴り字については、今回参照するテキスト（電子版）で用いられているものに変更したり、より近代的なものに直したり、異なる綴りの併用が見られるときには代表的なもので表したりしていることがある。

- ・ solace and comfort
- ・ pity and compassion
- ・ faith and believe
- ・ 動詞の同意語からなるワードペア

特に1番目から3番目の項目にかけては、例によっては重複するところもあるが、「同じ形の繰り返しを避ける工夫」「別のペアとの使い分け」「局所的に見られるか、そうでないか」などいくつかの面で、MargeryとJulianのワードペア使用には違いが見られることが示されると考える。

## 2. 1. solace and comfort

まずMargeryの当該ペアについては、以下に挙げた例のように基本的には名詞で、greatとの組み合わせのフレーズなど、ほぼ定型も含め複数が見られた。

Margery

- |         |                                 |
|---------|---------------------------------|
| 2       | have gret solas and comfort     |
| 35      | in a maner of solas and comfort |
| 675     | gret solas and cownfort         |
| 2318-19 | make hir solas and comfort      |
| 3367    | synguler solas and comfote      |
| 5224-25 | gret solas and comfort          |

Julianのsolace and comfortの使い方は、必ずしもMargeryの形とは一致しない。動詞も見られるほか、比較級との組み合わせもあり、また語順についても逆の形が用いられることもあった。

Julian

- |     |                                     |
|-----|-------------------------------------|
| 271 | comfortyn us and solacyn us         |
| 366 | have mor solace and comfort than... |

なおJulianでは、動詞のsolaceは、comfortのほか、別の動詞との組み合わせでペアになっているケースも複数見られた。以下にその例を示す。

- |        |                                    |
|--------|------------------------------------|
| 20     | be solacid and myrthid             |
| 540    | to gladen and to solacyn           |
| 853    | to plesyn hym and solacyn hym      |
| 855-56 | for he hath plesid and solacid hym |

このように、同じ意味または同じような意味を重ねるにしても、総じてJulianの方が多様な語句を使っていると言えるのではないだろうか。

## 2. 2. pity and compassion

Margeryに多いpity and compassionだが、Julianでも同一のペアが使われていることが確認できた。しかし、Julianで特徴的な点はむしろ、そのペアに含まれるpity、compassionに加えて、ruthを含む3語の組み合わせによりペアが作られていることである。中には、数行の短い間で、異なる組み合わせが見られるケースもあった。以下には、それらのペアの使い分けを示す例を引用している。

Julian

972	reuth and compassion
1018	pety and compassion
1060	ruth and pity
1068	ruth and compassion
1902-3	reuth and pite

また、以下の箇所はペアではなく3つ組だが、一度だけ、関係する3語すべてが組み合わせられている。

Julian

2911	pite and ruth and compassion
------	------------------------------

このような点は、Julianの表現上の工夫であると推察される。pity、ruth、compassionといった同意語の組み合わせ方を適度に変えることで、いずれかのペアのみに偏った印象を与えず、それでいて、重要な意味内容を強調していると言えるのではないだろうか。

Margeryに関しては、例えば以下に挙げた1100の3つ組の表現のようにmercyとの組み合わせは見られるが、Julianのように体系的ではなかった。おそらく意識的に関係する3語を扱っていたJulianに対して、Margeryの語句の使い方は、ヴァリエーションの一種としては評価できるが、Julianのような文体上の効果があったかどうかは、やや疑問である。

Margery

15	pety and compassyon
1100	mercy, pyté, and compassyon
1625	pyté and compassyon

## 2. 3. faith and believe

faith and believe は、MargeryでもJulianでも3例ずつ見出された。使用された数自体は同じだが、その使い方には若干の違いがあると考えられる。

まず、単語のfaithそのものが両テキストで使われている数を調べたところ、Margeryでは39箇所、Julianでは71箇所と、Julianの方が多ことがわかった（異なる綴りのfeith、feyth、faythを含む）。この点から、特にJulianにおいてはfaithは重要な単語の1つであると言えるが、その単語がワードペアになっ

た割合としては、Margeryの方が率が高いことになる。

次に、どのような文脈で当該ペアが用いられているかを見ていくと、以下のようであった。

#### Margery

- 2681 a woman of the ryth feyth and ryth beleve  
 2683 a good woman of the ryth feyth and ryth beleve  
 Book II 678 ne no fals feith, ne fals beleve for to han

#### Julian

- 278 But faith and beleve with charite...  
 383 (We know in our) faith and beleve be...  
 2168 knowen it in the feith and the beleve, ...

Margeryの場合は3例中2例が、当該ペアを含む、ほぼ同じフレーズの繰り返しとなっていた(2681の例と2683の例)。このように数行ほどの間でほぼ同じフレーズが見られることは、決まりきった表現が続くといった印象を与え、やや退屈な文体と取られてもおかしくないのではないか。もちろんJulianの方にはそういった使い方は見られなかった。

なお以下はペアではないので参考として示すが、Julianの2897行から2902行には、すべての文に1つ以上の単語faithが見られる箇所がある。その中にはワードペアは1つも使われていない。少し長いが引用して、faithをイタリックで示すことにする。

#### Julian, 2897-2902

For aboven the *feith* is no goodnes kept in this life,  
 as to my sight, and beneath the *faith* is no helpe of soule. But in the *feith*, there  
 will the Lord that we kepe us. For we have be His goodnes and His owne werkeing  
 to kepe us in the *feith*, and, be His suffrance, be gostly enmyte we are assayed  
 in the *feith* and made myty. For if our *feith* had none enmyte it should deserve  
 no mede, as to the understondyng that I hav in all our Lords menyng.

その使用頻度から、faithはJulianにとって重要な語・概念の1つと言えるのだが、それをワードペアとして使うことには必ずしも結びついておらず、Margeryでの扱い方とは、若干異なる姿勢が見られると言える。

以上のことから、少なくともfaithが用いられる際には、Margeryの場合はワードペアが強調などを担う主要な表現の1つであるが、Julianの場合は必ずしもそうとは限らず、表現の選択肢は他にもある、といったところかもしれない。

## 2.4. Margeryが用いた動詞のワードペアについて

Shibataは、Margeryに見られる同意語からなるワードペアの例の中に、動詞のワードペアをいくつか挙げていたが、それらの例はほとんどの場合Julianには見られない語句であることがわかった。

具体的には、Shibataが挙げたbid and command、hinder and let、kyd ne knowynなどの動詞の同意

語からなるワードペアは、Margeryでは、実際には各ペア個々の使用数は多くはないが、特定の文脈によるというより全体を通して用いられている印象である。それに対してJulianでは、少なくとも上掲の語句が使われている例を見つけることができなかった。同一の例でなくても、動詞のワードペア全般がJulianにどの程度見られるか、さらには、同時代の他の作品ではどうかといった点については、現在調査中である。そのため、Margeryにおける動詞のワードペアの使い方が特殊なのかどうかは現段階では明確ではないが、少なくともMargeryとJulianとでは使われている語句の違いは見られたので、その背景や要因について今後継続して調べていきたいと考えている。

### 2. 5. Margeryにワードペアの繰り返しが多い理由（考察）

今回の調査からは、総じてMargeryの方に、ヴァリエーションの少ない、同意語からなるワードペアが繰り返し用いられていたと結論付けられる。その理由としては何が考えられるだろうか。ここには、*The Book of Margery Kempe*が成立した経緯として書かれているように、彼女自身がテキストを書いたのではなく、口述して筆記者に書き取らせたものであることが、大きな要因として関わっていると推測される。口述する際、どうしても同じフレーズを繰り返したり、別の語句であったとしても筆記者が同じようなものと受け止めて1つにまとめてしまったり、本人が直接見て校正できないためそのままになってしまうなど、口述筆記において想定される様々な事情が、Margeryの文体の形成に関係していたと考えるならば、繰り返しにはやむを得ない面もあったと言えるのではないだろうか。

## 3. むすび

実際には、表現によってはMargeryとJulianとで明らかに違いが見られたものと、そうでないものが混在していたのは事実である。それでもやはり、いくつかの面において、MargeryとJulianのワードペアの使い方に相違点を見出すことが可能であり、そのことが、先行研究を含む読者にとっては、全般的にMargeryのワードペアの使い方には独特なところがあるとの印象に結びついていたと考えられる。ある語句がいかに重要な内容であったとしても、優れた表現だったとしても、繰り返しが過ぎるならば（厳密に言えば、いくつかの面で繰り返しが過ぎると見なされるならば）、それは時にマンネリと受け取られ、文体に対する批判へとつながるであろう。

今回はワードペアの局面を切り分けたのちに以上の点を考察したが、そのような考え方を、今後はワードペアに限らず、繰り返されるフレーズの全般を扱う際にも当てはめてみたいと考えている。

### 電子テキスト

TEAMS Middle English Texts. University of Rochester. <http://d.lib.rochester.edu/teams>

The Book of Margery Kempe. Lynn Staley, ed.

<http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/staley-the-book-of-margery-kempe>

The Shewings of Julian of Norwich. Georgia Ronan Crampton, ed.

<http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/crampton-shewings-of-julian-norwich>



## 参考・参考文献

- 青木繁博 (2015) 「特定の文学ジャンルにおける中英語ワードペアのヴァリエーション」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第45号、45-55.
- Cooper, William E., and John Robert Ross (1975) "World Order." *Papers from the Parasession on Functionalism*. Eds. Robin E. Grossman, L. James San, Timothy J. Vance. Chicago Linguistic Society, 63-111.
- Katami, Akio (2009) "Word Pairs in Middle English Mystic Prose of the Fourteenth Century." 『埼玉学園大学紀要』経営学部篇 9, 177-189.
- Kikuchi, Kiyooki (1995) "Aspects of Repetitive Word Pairs." *POETICA* (Tokyo: Shubun International Co., Ltd.) 42, 1-17.
- Koskenniemi, Inna (1968) *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto.
- . (1975) "On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom. Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 212-218.
- . (1983) "Semantic Assimilation in Middle English Binomials." *Studies in Classical and Modern Philology: Presented to Y. M. Biese on the Occasion of his Eightieth Birthday, 4.1.1983*. Eds. Iiro Kajanto, et al. Helsinki: Suomalainen Tiedekatemia, 77-84.
- Leisi, Ernst (1947) *Die tautologischen Wortpaare in Caxton's "Eneydos"*. New York: Hafner.
- Malkiel, Yakov (1959) "Studies in Irreversible Binomials." *Lingua* 8, 113-160.
- Miwa, Nobuharu and Su Dan Li (2003) "On the Repetitive Word-Pairs in English—With Special Reference to W. Caxton—." 『鹿児島大学法文学部紀要 人文科学論集』58, 49-66.
- Mollin, Sandra. (2012) "Revisiting Binomial Order in English: Ordering Constraints and Reversibility." *English Language and Linguistics* 16. 01, 81-103.
- . (2014) *The (Ir) reversibility of English Binomials: Corpus, Constraints, Developments*. Studies in Corpus Linguistics 64. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Shibata, Shozo (1958) "Notes on the Vocabulary of The *Book of Margery Kempe*." *Studies in English Grammar and Linguistics: A Miscellany in Honour of Takanobu Otsuka*. Eds. Kazuo Araki, et al. Tokyo: Kenkyusha, 209-220.
- Shimogasa, Tokuji (1997) "Binomial Expressions in *Le Morte Arthur*." *Bulletin of the Faculty of International Studies, Yamaguchi Prefectural University* 3, 59-74.
- Stone, Robert Karl (1970) *Middle English Prose Style: Margery Kempe and Julian of Norwich*. The Hague: Mouton.
- Wilson, R. M. (1959) "Three Middle English Mystics." *Essays and Studies*. New Series 9, 87-112.
- Yamaguchi, Hideo (1971) "A Study of the *Book of Margery Kempe*." 『神戸女学院大学論集』第18巻 第1号, 1-44.
- 谷明信 (2003) 「初期中英語the 'Woing Group' のWord Pairsの用法とその特徴」『兵庫教育大学研究紀要』第23巻 第2分冊、19-24.
- . (2008) 「Chaucer の散文作品におけるワードペア使用」『ことばの響き—英語フィロロジ—と言語学—』今井光規・西村秀夫(編). 東京: 開文社、89-116.
- 渡辺秀樹 (1994) 「同意語並列構文の系譜」『英語青年』140. 6 (1994年9月号)、285-287.